末黒野

すぐろの

5月号（通巻825号）

末黒野　平成二十七年五月五日発行　第七十巻第五号（通巻八二五号）

桑の箸

小川玉泉

風花や税申告の列につく

日の丸へあまねき日差建国日

照り焼きの鰆ほぐしぬ桑の箸

バレンタイン孫手作りのチョコ届く

ゆつくりと軒樋伝ひ春の雨

山際の白梅汐日捉へをり

冴返る本堂姉の大練忌

独楽ひさぐ店先掠め初つばめ

引き潮の中州に競ひ蘆の角

土筆摘む鉄橋をゆく三両車

鶯の声や小石に躓きぬ

首痛くなるまで仰ぐ辛夷の芽

梅ひらく

松本三千夫

竹林の道幅二尺冴返る

夕鐘の余韻に籠る余寒かな

建国日ひときは光る根無し雲

春灯や何か言ひたげなるこけし

梅東風や寺門クルスの紋掲げ

二月十二日、山下一海先生六回忌

一樹のみ満開の梅一海師忌

下萌や鳶の高鳴く蜑の道

家ごとに小さき橋掛け梅の里

春寒し海ひとところ日の当り

春禽に出入自由や基地の空

稲荷社の鳥居百千山笑ふ

流れ藻を置いてけぼりや春の潮

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）

白梅

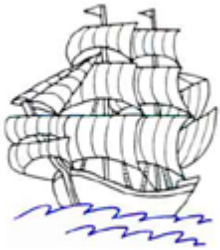
大橋伊佐子

蒼空に透くほど淡き春の月
白梅の青き暮色となりにけり
煮大根味沁みつくし寒明くる
庭に来る二羽の山鳩春隣
春泥に夫の手を借る春の夢
初午や小さくなりし願ひごと
立春や星やはらかくうるみをり
日脚伸ぶ行き交ふ人の声弾み
鷺歩む浅瀬の水も温みけり
爛爛と満天の星冴返る

深雪晴

黒滝志麻子

白鳥の留まる影のやはらかし
雪吊の朝の日に映ゆ幾何模様
蠟梅や古民家に干す紺絣
寒芹の手に残りたる香りかな
山越しの風が耳削ぐ寒の月
奥能登の山河声なき深雪晴
朝市の山風重き寒九かな
鳥一羽梢にひかり春隣
梵鐘のひびく集落春立てり
蕗の芽にふるる津軽の風かたし



畦焼

田中臥石

雁渡る空透明に岬端
舌の上の春の苺の甘きかな
原稿の枡目飛ぶ字や春の夜
鳥雲に入るや岬の海日和
推敲の朱筆の走る余寒かな
本屋出づ春の霙に傘持たず
春光の甍や日蓮誕生寺
白梅のひかりや犇と風の音
畦焼の声を掛け合ふ井堰口
畦道に火事の始末の消防車

晩冬

松田泰子

水仙の花の高さの風匂ふ
重たげに身を揺すりけり実南天
枯れてゆくものにも残る光あり
死と向ふ本を読みをりちやんちやんこ
雲払ふ気配も見せず眠る山
冬紅葉くぐりて落つる水の音
雲ひとつ行方忘れて冬日和
安曇野のつのる夜風や干菜風呂
本降りや待ちぬし春の雨なれど
梅匂ふまで青空の下りて来し

乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は次号は末尾になり以下同じ）

寒日和　菅野日出子

白波の鞣すなぎさや磯干鳥
寒風や砂に埋れし捨小舟
浜駈くる赤毛の馬や寒日和
房総を指呼に三浦の懸大根
下仁田の葱のあまさや舌焼いて
分譲の立札の丘蕗の薹
街灯の切れて久しや空つ風

寒明く　堺　昌子

照り翳る山の気息や冬桜
雨戸繰る黙を深むる雪の音
通し土間の奥の裏山春隣
ふり返る橋のたもとの冬桜
春隣厚手の和紙に折る羊
南向く窓より風を四温晴
しののめの空より寒の明けにけり

日脚伸ぶ　中野久雄

探梅や野末に仰ぐ昼の月
日を溜めて臘梅匂ふ大藁屋
野阜に残る夕日や日脚伸ぶ
居酒屋の他は仕舞ひし寒夜かな
突堤の釣竿撓ふ春隣
山裾に煙一筋春立ちぬ
川底の魚影うごめく浅き春

星凍つる　西川みほ

日の移る窓の凍蝶みじろがず
早世の弟の忌や星凍つる
冬耕の村ふところに磨崖仏
湖畔道一禽哮(たけ)る雪解風
笹鳴を礁へ落す崎の端(はな)
寒凪やかもめの群るる舟だまり
過る影覗く影受く寒牡丹

氷柱　森清尭

臘梅や寺苑の風のやはらかく
日をまとふ冬鷺堰をみじろがず
水鳥の水脈に群がり巨船出づ
円陣を解く野球児ら息白し
氷柱溶く光の束をほどくごと
立春の日の出にひたり露天の湯
泡ひとつ残して甕の薄氷

峡泊り　吉田きみえ

水替へて水仙匂ふ仏間かな
枯蓮や水脈を残して番鳥
寒最中海に一つの手漕ぎ舟
まるまると冬大根の無人売り
寒明けの梢に光り一つ星
梅園を出でて子等との峡泊り
梅ひらくかつて夫との径なる

冬牡丹　石黒興平

鮟鱇や口上長き吊し切り
風紋に轍ふたすぢ懸大根
安房からの風をまともに懸大根
三日はや書斎がはりの喫茶店
寒牡丹緋色尽して菰ごもり
着せ藁のやや前かがみ冬牡丹
鳴弦の儀に鎮もりぬ鬼やらひ

青炎集

小川玉泉選

横浜　原和三

弾初の洩るる小路や神楽坂
碧天へ放水の虹出初式
青竹の弾くる高音大どんど
寒林のしじま深むる足音かな
車座に草履編む園日脚神ぶ
雨あとの木木の艶めき春隣

横浜　岡本ヨシエ

古民家の裏の竹叢笹子鳴く
臘梅の香に歩をかへす里日和
呼び交はす畦の母と子若菜摘
鳩に餌を与ふる媼日脚伸ぶ
福豆の頬に当りぬ神の庭
西南を向き節分の恵方巻

横浜　上月智子

小晦日路地に八匹鯛焼かれ
手作りのややいびつなる鏡餅
風呂敷の形は酒液年始客
たぢろがぬ釣師の背中どんど爆ず
寒椿据り宜しき志野徳利
朱の著き巫女の伊達襟春の雪

横浜　河合とき

縁側の猫も見てをり牡丹雪
切干に日向の匂ひ夕支度
炊きたての飯つややかや寒玉子
浅草に芝居観たる夜根深汁
小匙もて煮凝りすくひ御積りに
船笛の枕に届く霜夜かな

横浜　川村亘子

潮風の運ぶ浪音春近し
逆上り出来たと泣く児春立ちぬ
春めくや行く白雲に光満ち
獺に会うてもみたし今日雨水
薄霞真白きままに今朝の富士
暖かや抱く小犬の日の匂ひ

横浜　三橋玲子

生きいきと大地の息や霜柱
ひとりしてまこと至福のひなたぼこ
畳なはる嶺嶺の清しや春立ちぬ
捨て粗朶にほつと芽立ちのふたつ三つ
人住まぬ生家の庭の蕗のたう
全快の友はれやかに麦を踏む

新宿　稲垣佳子

寒椿一枝厨のあらたまる
天敵に陣たて直す鴨の群
浜風に焔の反りやどんど焼
てつぺんのだるまへ遂にどんどの火
早咲きの白梅の香や女坂
林泉の水辺の小鷺春立てり

横浜　榊山智恵

霜解けの光を止め苔の青
浮舟のかすかな揺れや寒牡丹
臘梅や頬刺す風の匂ひ立ち
冬うらら烏天狗の行者顔
寒念仏小町通りを横切りぬ
鎌倉の寺苑巡りぬ福寿草

横浜　斉藤マキ子

水底の色となりたる落葉かな
餅搗きて繋がる地縁ビルの街
待春や彩整はぬ花時計
春近し牛舎に餌をきざむ音
針供養いまも丈夫な糸切歯
天を突く曙杉の芽立ちかな

横浜　波多野孝枝

冬日透くステンドグラス葡萄の絵
車庫入れの音に目覚めぬ小夜時雨
着ぶくれて渋谷の駅の変はりやう
寒満月閉むるに惜しき木の雨戸
痩せし身に子より贈らる羽根蒲団
亡き友の跡地は四角寒の雨

耕土集

松本三千夫選

雲流る寒夕焼を映しつつ　柏　渕田　則子
肉まんのてつぺんの皺雪催ひ
俯瞰すやライトアップの雪まつり
まだ箱にある待春のベビー靴
如月の土に滲み入る久の雨

六尺の雪の故郷に降り立ちぬ　新　潟　太田チヱ子
雪の田や電柱の影長々と
冬木の芽米つぶほどの光かな
きのふまで立ちてをりたり雪だるま
浅草に新しき海苔買ひにけり

侘助の落ち行く先や潦　相模原　内田　梢
片足を畳み直してみやこ鳥
薄氷を突いて厚さ確かむる
せせらぎに合はせて戦ぐ猫柳
春兆す青墨の書の凜として

音を消し色を消しつつ雪の降る　横浜　今野　明子
うづくまる人を尻目に冬の鯉
陽光の音沙汰無しや梅一輪
受験子の合格告げてついと去る
人寄する梅一本の華やぎぬ

横風のすさぶ尾根道初不動　東小薗美千代
新聞のインクの匂ひ日向ぼこ
満天星の赤き芽尖る垣根かな
山裾の川風やさし猫柳
白梅の際立つ夕べ杣の家

着膨れの幼の笑顔乳母車　町田　伴　秋草
メール打ち右手袋を落としたり
あけぼのの朱色地平に春浅し
ふらここを漕ぐ児の足の宇宙蹴る
日日痩する白き月浮く春の空